

【特別調査報告】 真宗大谷派大谷祖廟

目次

- 一、緒言
- 二、〔特別寄稿〕 近世の東本願寺大工棟梁―笠井家の新出史資料を中心に―
(小山興誓)
- 三、〔史料紹介〕 『元禄十六年大谷御堂移徙之記』
(安藤弥・川口淳・千枝大志)
- 四、展望

緒言

真宗大谷派（東本願寺）において、二〇二三年に「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要」を迎えるにあたり、あらためてさまざまな歴史的検証が課題となる。真宗大谷派の関係学校である同朋大学の学術研究機関として、仏教文化研究所としても、いくつかの課題に取り組み、研究成果を示すことを考えている。その一つとして、大谷祖廟の歴史に再注目したい。

大谷祖廟とは現在、京都市東山区円山町に所在する、真宗大谷派・真宗本廟（東本願寺）の飛び地境内であり、親鸞をはじめ本願寺歴代、全国各地の門徒の遺骨が収められている場である。そもそもは浄土真宗の宗祖親鸞の没後、文永九（一二七二）年に親鸞の末娘覚信尼と関東門弟（同朋）が協力して親鸞の墓所である「大谷廟堂」が成立する。この廟堂が親鸞曾孫の覚如により寺院化して本願寺となり、戦国時代には蓮如により本願寺を本山とする「教団」が形成されていく。その後、慶長九年（一六〇四）に東本願寺が分立・独立し、江戸時代初期に本山寺院として堂舎・境内が整備される中で、寛文十（一六七〇）年に、現在地に大谷祖廟が成立したとされている。現在では、真宗本廟が「宗祖聖人の真影を安置する御影堂及び阿弥陀堂を中心とする聖域であって、本願寺とも称し、本派の崇敬の中心、教法宣布の根本道場」、そして大谷祖廟が「宗祖聖人墳墓の地」と位置付けられている¹。

【特別調査報告】真宗大谷派大谷祖廟調査

東本願寺門徒にとって大切な信仰の場である大谷祖廟であるが、その歴史については、古くは大正四（一九一五）年の山田文昭「大谷本廟創立考」²や昭和十三（一九三八）年の小串侍「大谷本廟沿革考」³、そして昭和三十八（一九六三）年の細川行信著『大谷祖廟史』⁴という確かな叙述があるものの、その詳細が一般によく知られているわけではない。また、未解明の部分も多く、『大谷祖廟史』以降、本格的な研究も管見の限りではない⁵。とはいえ、真宗大谷派において所蔵資料の基礎情報はすでに調査されており、内容の精査が次なる課題になっている。真宗史とそれのみならず各分野の研究が進展した現在の視点から、大谷祖廟の歴史を捉え直し、再検討していくことは意味ある課題と考える。

そこで、二〇二〇年十二月二十四日に大谷祖廟への訪問調査を履行した。調査をご許可いただき、ご高配をいただいた関係各位に感謝申し上げます。調査訪問者は安藤弥（所長）、青木馨（客員所員）、川口淳（所員）ならびに特別協力者の小山興誓氏である。今回の調査では、『大谷年中記』（御堂日記）をはじめとする文献史料の内容確認とともに打敷等の現物資料や武家墓の実見調査、ならびに建造物の歴史的情報の収集を目的とした。そこで、小山氏には特に大谷祖廟の建造物の歴史について建築史研究の視点からの検証にご協力いただいた。

調査により確かめられた内容について、特別調査報告を行いたい。一つには、建造物調査の成果として、東本願寺大工の歴史的事実に関する新見も加えた小山氏の特別寄稿を掲載する。もう一つには、文献史料

の調査成果として、『元禄十六年大谷御堂移徙之記』の史料翻刻・紹介を行う。もって大谷祖廟の歴史的再検証の端緒としたい。

(文責 安藤 弥)

注

- (1) 「真宗大谷派宗憲」等を参照。
- (2) 山田文昭『真宗史之研究』(破塵閣書房、一九三四年)再録。
- (3) 『大谷学報』第一九卷第二号。
- (4) 東本願寺出版部、一九八五年改訂。
- (5) 『真宗本廟(東本願寺)造営史―本願を受け継ぐ人びと―』(東本願寺出版部、二〇一二年)においても大谷祖廟の歴史は取り上げられなかった(現在に至っての反省点である)。

◎〔参考〕大谷祖廟略年表 (『大谷祖廟史』参照、一部修正)

寛文 六年	1666	清閑寺山に廟所移転の内談があるも不成立。
寛文 八年	1668	東大谷の地を買得する。
寛文 十年	1670	廟所を東大谷に移す。
天和 四年	1684	武家墓ができる。
元禄十四年	1701	廟所、改葬される(御堂・諸殿整備)。
元禄十六年	1703	大谷御堂の移徙法要が行われる。
宝永 六年	1709	虎石を祖墳上に置く。
延享 元年	1744	廟所の増地につき、幕府と折衝する。
延享 二年	1745	幕府より一万坪の寄進を受ける。

延享 三年	1746	徳川家重より寺地安堵の判物を受ける。
天明 八年	1788	天明の大火で東本願寺両堂・諸殿焼失。第九世乗如が本尊等を護持し大谷祖廟に退避。
文政 三年	1820	大谷新道を開く。
安政 四年	1857	大谷新道南北の畑地を買得。
文久 二年	1862	大谷御坊において「親鸞六百回御遠忌」執行。表唐門(総門)建立。
明治 五年	1872	御坊を管刹に改称。
明治 九年	1876	管刹を別院と改称。
明治四五年	1912	大谷別院で「親鸞六百五十回御遠忌」執行。
昭和二七年	1952	大谷別院から大谷本廟に改称。
昭和二八年	1953	本廟事務所を開設。
昭和三六年	1961	本廟事務所を本山上局直属の本廟部とする。
昭和三八年	1963	大谷本廟で「親鸞七百回御遠忌」執行。記念として『大谷祖廟史』刊行。
昭和四八年	1973	落雷で書院等焼失。三年後に庫裏を新築。
昭和五六年	1981	大谷本廟を大谷祖廟と改め、祖廟事務所を宗務総長の統括とする。
平成二二年	2010	「親鸞七百五十回御遠忌」記念事業の一環として本堂と表唐門(総門)を修復。

近世の東本願寺大工棟梁——笠井家の新出史資料を中心に——

小山 興 誓

はじめに

京都市下京区烏丸通七条上るに巨大な伽藍を構える真宗本願東本願寺は、親鸞（一一七三～一二六二）を宗祖に仰ぐ真宗大谷派の本山である。その歴史は鎌倉時代、文永九年（一二七二）の親鸞廟堂草創にまで遡るが、永年にわたる戦乱により幾度となく寺地変えを余儀なくされ、ようやく現在地に落ち着くのは、東西本願寺分派後の慶長七年（一六〇二）のことであった。しかし、東本願寺は西本願寺とは異なり、その後江戸時代から明治時代にかけて、前後六度にも及ぶ造替を繰り返し、今日に至っている。その都度、諸国門徒の筆舌に尽くし難い苦勞と懇念によって造営されてきた東本願寺大難事業の歴史を示しておけば、表のように

なる。

真宗本願東本願寺では、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌特別記念事業として、明治度造営の御影堂・阿弥陀堂・御影堂門の修復が実施され、十年以上に及ぶ工事も平成二十七年（二〇一五）に完了し、各棟の詳細や修復の内容は修理工事報告書として刊行されている^①。また、修理された三棟以外にも、現存する木造建築群の調査結果をまとめた総合報告書も発行されている^②。そして、令和元年（二〇一九）五月十七日には、境内建造物の中から御影堂・阿弥陀堂・御影堂門・阿弥陀堂門・鐘楼・手水屋形の六棟が「近世以来の伝統木造建築技術による比類ない規模と高い格点を備えた近代の寺院建築群」として重要文化財に指定されることが発表され^③、改めてその価値の高さが証明された。

表 東本願寺御影堂・阿弥陀堂・大門（御影堂門）造営略年表

※棟梁・肝煎に関して、不明または確定できない場合は空欄となっている。

※大門（御影堂門）に関しては、現在の二重門の形式となった元文以降の造営を掲載している。本稿では元文の大門造営を元文度造営とする。

造営	和暦	西暦	月	出来事	棟梁	肝煎（惣肝煎）	出典
慶長度	慶長8年	1603年	10月	阿弥陀堂 上棟			①『造営史』
	慶長9年	1604年	9月	御影堂 上棟			
明暦・寛文度	明暦4年	1658年	3月	御影堂 上棟	西村越前掾政継 茨木三河介宗種 茨木志摩掾宗満		②木子文庫 「東本願寺御影堂 棟札写（明暦四）」
	寛文10年	1670年	3月	阿弥陀堂 上棟	茨木志摩掾宗満		①『造営史』
元文度	元文2年	1737年	11月	大門 柱立	笠井若狭藤原正傳	谷口五兵衛	③『御再建見聞私記』 ④『天明八年日記 御再建日記』
	元文3年	1738年	4月	大門 上棟	田邊備後源芳信 高木淡路源喜始	木子市右衛門 富永理兵衛 柴田理右衛門	
寛政度	天明8年	1788年	1月	天明の大火で類焼			①『造営史』 ③『御再建見聞私記』 ④『天明八年日記 御再建日記』 ⑤『明治造営百年 東本願寺・下』
	寛政9年	1797年	3月	御影堂 上棟	笠井若狭正安 田邊備後長重	柴田新八郎貞英 柴田忠右衛門貞照	
	寛政10年	1798年	3月	阿弥陀堂 上棟	高木小太郎久治	西木清右衛門久重 井上三十郎秀信	
	寛政12年	1800年	11月	大門 上棟		橋本新兵衛政清（大門のみ）	
文政度	文政6年	1823年	11月	山内失火で焼失			①『造営史』
	天保4年	1833年	8月	御影堂 上棟	笠井三河正直 田邊備後義重 高木淡路有義 笠井若狭正典	青木新助良容 山中平左衛門宗重 柴田平八郎貞種 中江定治郎義忠 柴田新八郎棟躬	
	天保6年	1835年	3月	阿弥陀堂 上棟		青木新助良容 中江定治郎義忠 柴田新八郎棟躬	
	弘化4年	1847年	3月	大門 上棟	笠井若狭正佐 田邊備後義重	柴田新八郎棟躬 中江貞次郎義忠	
安政度	安政5年	1858年	6月	安政の大火で類焼			①『造営史』
	万延元年	1860年	3月	御影堂 上棟	田邊河内道重 笠井若狭正重 高木讃岐道保	柴田伊勢大掾貞次 伊藤平左衛門守富 柴田新八郎棟齋 橋本治助一富 古橋太郎兵衛（大門のみ）	
			7月	阿弥陀堂 上棟			
明治度	元治元年	1864年	7月	禁門の変で焼失			①『造営史』
明治22年	1889年	5月	御影堂 上棟	伊藤平左衛門守道			
明治25年	1892年	11月	阿弥陀堂 上棟	木子棟齋			
明治43年	1910年	4月	大門 上棟	市田重郎兵衛 市田辰蔵		⑧『御影堂門御修復 工事報告書』	

〈参考文献〉

- ①『真宗本廟（東本願寺）造営史一本願を受け継ぐ人びと一』（東本願寺出版部、2011年）
- ②木子文庫「東本願寺御影堂棟札写（明暦四）」（木16-3-8）（東京都立図書館蔵）
- ③城端別院善徳寺史料『御再建見聞私記』（城端別院善徳寺蔵）
- ④大谷大学真宗総合研究所編『天明八年日記 御再建日記』真宗本廟（東本願寺）造営史料叢刊1（大谷大学、2014年）
- ⑤『明治造営百年 東本願寺・下』（真宗大谷派本廟維持財団、1978年）
- ⑥岩城家文書「番匠研究 徹到録 甲」明治36年（1903）（仮0-13-30）所収「御大門御上棟札写」（滑川市立博物館蔵）
- ⑦伊藤平左衛門「両堂再建物語（2）四たびの炎上」『真宗』（東本願寺出版部、1985年2月）
- ⑧『真宗本廟（東本願寺）両堂等御修復工事 御影堂門御修復工事報告書』（真宗大谷派（東本願寺）、2017年）

このように修復記念事業を契機にこれまでの本山造営の歴史に関してもさまざまな視点からの検証がなされ、総合的な造営史の調査・研究の成果は『真宗本廟（東本願寺）造営史―本願を受け継ぐ人びと―』（以下、『造営史』）として編纂されている。⁴

同書に所収された関西大学名誉教授永井規男氏による「歴史上の東本願寺の大工棟梁」では、明暦・寛文度、寛政度、文政度、安政度、明治度と度重なる再建に関与した工匠について、これまでは断片的であった系譜や軌跡を整理して綴った精緻な論考であった。具体的には明暦・寛文度の東本願寺（東御門跡）大工棟梁茨木氏から、十八世紀前半に成立する笠井家を筆頭として、他に田邊（資料により田辺、田邊の表記があるが、本稿では引用でない場合は実際に棟札に記載事例がある田邊を用いる）、高木（高木の表記もあるが、本稿では高木を用いる）両家を含めた計三人の代々継職する棟梁方を置く造営組織を紹介し、その棟梁衆の下で造営の実務を担った肝煎大工柴田家が、明治度造営の伊藤平左衛門や木子棟齋といった主要な工匠へと系譜的にも繋がる流れが明示されていた。⁵

一般的に東本願寺の大工棟梁といえば、明治度造営における御影堂の伊藤平左衛門（九代守道、一八二九―一九一三）及び阿弥陀堂の木子棟齋（一八二七―九三）の両棟梁が著名であり、寛政度・文政度・安政度の造営において東本願寺棟梁職の地位にあった笠井家を知る人は少ない。その理由として、笠井氏が東御門跡大工であったにもかかわらず、

東本願寺境内に棟梁を勤めた記録が残る建造物が現存していないことも関係しているよう。それは西本願寺（西御門跡）大工である水口家が国宝である御影堂・阿弥陀堂を始めとする西本願寺の現存主要堂宇の棟札銘に名を残しているのとは対照的である。また、水口家は本山西本願寺だけではなく、本願寺西山別院（京都市西京区）、顕証寺（大阪府八尾市）、本照寺（大阪府高槻市）、本願寺堺別院（大阪府堺市）、勝興寺（富山県高岡市）などの御坊格寺院の堂宇造営にも関与した記録が残り、それらの遺構がいずれも文化財に指定され、建造物と共にその偉功を今に伝えている。それに対して、東御門跡大工笠井家が関った記録が残る現存建造物で報告されているのは東本願寺の宗祖廟所である大谷祖廟（京都市東山区）の文久二年（一八六二）上棟の表唐門（総門）のみである。⁶その現存遺構の少なさも手伝ってか、東本願寺寛政度・文政度・安政度という短期間での三度の伽藍再建という難事業を成し遂げた業績とは裏腹に、棟梁笠井氏の知名度は低いと言わざるを得ない。

『造営史』「歴史上の東本願寺の大工棟梁」では、笠井氏の確かな初出資料として本山大門（御影堂門）の元文三年（一七三八）の棟札写（『御再建見聞私記』所引、城端別院所蔵）に記された「笠井若狭藤原正傳・田辺備後源芳倍・高木淡路源喜始⁹」を紹介しているように、その登場は記録上、元文の大門建立が最古のものだと考えられてきた（表参照）。しかし、それ以前の元禄十五年（一七〇二）の時点で、すでに笠井氏が東御門跡御大工になっていたことを示す文書が、江戸時代の京都御大工

頭中井家の文書「東御門跡大工笠井若狭一札」¹⁰において確認できる。さらに、令和元年（二〇一九）に東本願寺大谷祖廟から発見された元禄十五年（一七〇二）の本堂及び北門の棟札銘によっても、笠井若狭が工匠の筆頭になっているのを裏付けることができたと共に、祖廟表唐門（総門）以外にも笠井家の遺構が現存することが判明した。

永井規男氏は『造営史』において笠井家を筆頭とする計三名の棟梁が統率する造営組織に関して、「その最初は元禄十四年（一七〇一）の大谷祖廟の造営のときからと考えられる（「大谷年中記」）」と記しており、¹¹本堂及び北門の元禄十五年の棟札銘に笠井若狭をはじめとする工匠三名（笠井・宮川・田邊）を併記することからも、その考察が正しかったことが証明された。

また、大谷祖廟以外にも、山科別院長福寺（京都市山科区）に保管されている享保二十年（一七三五）の台所修造棟札によって、幕末まで世襲された笠井・田邊・高木による東本願寺三棟梁が本山の元文度大門造営以前に成立していた事例も明らかになったので、併せて紹介する。

一 東本願寺の棟梁

最初に棟梁笠井家が東本願寺造営の歴史に現れるまでを『明治造営百年東本願寺・下』所収の京都大学名誉教授川上貢氏による「江戸時代の東本願寺建築」¹²や『造営史』、近畿大学名誉教授櫻井敏雄氏による『頭

証寺本堂調査研究報告書』所収の「御坊格寺院本堂と工匠」（東本願寺の工匠）¹³、『東本願寺小景』所収の「棟梁の系譜（一）」（東本願寺の工匠たち）¹⁴などの既往研究・文献を基に概観する。

まず、東本願寺創建時の慶長八年（一六〇三）の阿弥陀堂、翌九年（一六〇四）の御影堂の工匠に関しては資料を欠き、不明となっている。¹⁵

ちなみにこの頃の西本願寺では、慶長二年（一五九七）上棟の御影堂及び元和四年（一六一八）建立の阿弥陀堂（現在の本願寺西山別院本堂〈京都府指定文化財〉）の大工を「水口若狭宗久」が勤めており、寛永十三年（一六三六）の現在の御影堂（国宝）の棟札においても、「大工水口若狭守藤原宗久／棟梁 水口伊豆守藤原家久」というように、大工棟梁はいずれも水口家となっている。¹⁶

次の東本願寺明暦度御影堂造営では、江戸時代に畿内（大和・山城・河内・和泉・摂津）及び近江を加えた六か国の大工・杣・大鋸を統制・支配した京都御大工頭中井家直属の受領棟梁の一人である西村越前掾政継らと、この頃の東御門跡大工であった茨木三河介宗種・茨木志摩掾宗満が協働する形で棟梁を勤めている。¹⁸

明暦度御影堂に続いて造営された寛文度阿弥陀堂では茨木志摩が棟梁となっている。¹⁹この茨木志摩掾宗満は延宝三年（一六七五）建立の長浜別院大通寺鐘楼（長浜市指定文化財）の棟札にも大工として記載がある。²⁰しかし、『造営史』にもあるとおり、この後、茨木氏の名前は東本願寺や御坊造営の記録には出てこない。代わって、東御門跡御大工とし

て登場するのが「笠井若狭」である。『造営史』「歴史上の東本願寺の大工棟梁」では、笠井家の確かな初出資料として東本願寺大門（御影堂門）の元文三年（一七三八）の棟札（『御再建見聞私記』所引棟札写、城端別院所蔵）に記された「笠井若狭藤原正傳・田辺備後源芳倍・高木淡路源喜始」を引用している。²²この東本願寺元文度大門上棟より三十五年以上遡る元禄十五年（一七〇二）の時点で、笠井若狭が東御門跡御大工であったことを示す文書が大工頭中井家関係資料「東御門跡大工笠井若狭一札」において確認できる。同文書は中世以来の名門大工である京十人棟梁を組頭とする京大工十組が、元禄十五年に中井家（中井役所）が実施した京大工中ヶ間改によって、京大工十八組として再編成されたことを示す史料として、『中井家大工支配の研究』の注釈に掲載されている。²³

【東御門跡大工笠井若狭一札】（B-3-b-5）²⁴

一 今度京都大工中ヶ間改ニ付、私義東御門跡江出入之大工ニ而御座候故、十八組之加判御許容被為遊被下難有奉存候、弥十八組同前ニ乍憚奉御下知請、前々々被為仰付候御法度之趣并今度京都大工中ヶ間改ニ付奉願候御条目之通段々奉承知、急度相守、聊以違背仕間敷候、尤抱置候弟子共之儀者、十八組江入可申候、為後日一札仍如件

東御門跡御大工

元禄十五年

笠井 若狭

この時の京大工中ヶ間改によって、代々の西本願寺大工であった水口家の当主水口伊豆を組頭とする伊豆組も成立し、中井家の配下に組み込まれている。その後、享保二年（一七一七）までには京大工組は十八組から二十組に再編成されるのだが、明和二年（一七六五）頃の「六ヶ国大工杣木挽組頭名前并人数書」では、西本願寺大工水口伊豆、東本願寺大工笠井若狭は共に京大工二十組とは別格の扱いとなっている。²⁵

以上のとおり、理由は不明ながら十八世紀初頭には東本願寺棟梁が茨木氏から笠井氏に交代しているのだが、棟梁は笠井一人ではなく、他に二名を配した計三人の棟梁を置く、「三棟梁」が統率する造営体制が幕末まで継続する。ここで三棟梁に関連した文献資料を二つ紹介したい。

まず、文政度から東本願寺造営に参加する尾張伊藤平左衛門家の八代守富（一八一八～一八一四とも）七七による日記・覚書である『見聞学行跡集』の一部が『明治造営百年 東本願寺・下』に所載されており、²⁶その中の寛政度造営の項に、「三棟梁」として「笠井若狭／田邊備後／高木淡路」の名を挙げている。

次に、昭和五十七年（一九八二）に滑川市立博物館へ寄贈された岩城家文書の中にも東本願寺棟梁に関する記述が見られる。岩城家は初代の庄蔵が東本願寺文政度造営の小屋懸りを、庄蔵の孫である岩城庄之丈（一八四三～一九二八）も明治度造営の小屋組係を勤めた越中滑川の名門大工家で、庄之丈による明治三十六年（一九〇三）の「番匠研究 徹到録甲」（仮013-30）という文書の中に記載がある。同文書は覚書であ

り、記載箇所によっては「維時文久元辛酉秋 伊藤八世ノ主守富謹曰」や「京都東本願寺旧棟梁笠井參河様ヨリ拝借ス於京都寫之」、「木子棟齋先生御伝言」というように誰の文書や発言を記したのかもわかる。²⁸その中に岩城庄蔵が参加した文政度造営に関する記録を基にしたと思われる「東本願寺旧棟梁」「父 笠井三河／子 仝 若狭／父 田邊備後／子 仝 河内／高木淡路」という一文がある。このことから棟梁は家職化されており、笠井家は若狭と三河を、田邊家は備後と河内を受領名としている。この内、高木家は淡路としか書かれていないが、表のように讃岐（安政度御影堂棟札銘写）²⁹も受領している。

二 大谷祖廟における笠井家の新出史資料

記録に残る三棟梁の事例としては、永井規男氏が『造営史』『歴史上の東本願寺の大工棟梁』で考察されたとおり、大谷祖廟本堂が最初のものであろう。

東本願寺の宗祖廟所として、寛文度阿弥陀堂が完成する寛文十年（一六七〇）に本山境内西南隅から現在地（京都市東山区円山町）に移った大谷祖廟は江戸時代には大谷御坊と称された。明治以降の管刹、別院という扱いを経て、昭和二十七年（一九五二）の大谷本廟から現在の大谷祖廟と改められたのは同五十六年（一九八一）のことである。³⁰

『大谷祖廟史』によれば、延宝三年（一六七五）より慶応三年（一八

六七）までの輪番所日記である『大谷年中記』を基にした元禄十四年（一七〇一）四月二十二日の本堂斧始の記事に、「筒井若狭、宮川八郎兵衛、田辺八兵衛」の三名が出仕したことが書かれている。³¹先に紹介した元禄十五年の「東御門跡大工笠井若狭一札」と照らし合わせれば、筆頭の筒井若狭は笠井若狭の誤記であろう。それは令和元年（二〇一九）に大谷祖廟の現本堂及び北門のそれぞれの小屋裏より発見された棟札からも裏付けられる。³²南面する本堂は正面に一間の向拝を付けた入母屋造、本瓦葺、平入で、東西を棟通りとする棟木下面中央に二枚の棟札が存在する。いずれも東を頭として、東側の棟札には「洛東大谷本願寺開山靈廟大寶殿」（図1）、西側の棟札には「大谷本願寺開山廟堂」（図2）と中央上部に記したもので、棟木に直接和釘留めされているため、裏面の確認はできていない。二枚とも東本願寺第十七代真如（一六八二〜一七四四）の銘と、斧始の翌年の元禄十五年（一七〇二）一月二十九日の年記があり、それは『上檀間日記』の本堂上棟日とも一致する。³³「大谷本願寺開山廟堂」の棟札中段の六名は、『大谷祖廟史』が参考とした『大谷年中記』・『大仲居日記』に記載された東山大谷建立の普請奉行衆である。下段には「笠井若狭可廣／宮川河内清教／田邊備後森安」の三名を列記している。この元禄十五年の二枚の棟札銘とほぼ同内容の記載が『御再建見聞私記』（城端別院善徳寺史料）にも存在するのだが、『造営史』では同書所引の元文三年（一七三八）東本願寺大門棟札の方を笠井氏の確かな初出資料としている。³⁴

総高一三六・九 cm 肩高一三四・〇 cm 上幅二一・〇 cm 下幅二一・〇 cm 厚さ二・二 cm



初祖 親鸞十七世法孫大僧正真如 光性 造建
洛東大谷本願寺開山靈廟大寶殿
元禄十五年龍集壬午孟春二十有九日爰爲上梁敬書

図1 大谷祖廟 本堂棟札（東）

総高一六七・〇 cm 肩高一六三・九 cm 上幅二一・〇 cm 下幅二一・〇 cm 厚さ二・三 cm



大谷本願寺開山廟堂 真如大僧正建立
元禄壬午正月辛亥
富井主水清長 大森市郎左衛門守常 笠井若狹可廣
西村義兵衛明敷 宮川河内清教
篠原仲衛門延政 田邊備後森安
上田織部正信 廣瀬武助重久

図2 大谷祖廟 本堂棟札（西）

総高六三・九 cm 肩高六〇・〇 cm 上幅二一・〇 cm 下幅二一・〇 cm 厚さ〇・九 cm



元禄十五 歲仲冬廿日
洛東大谷本願寺廟所惣門 奉行 大森良衛門守常 笠井若狹可廣
真如大僧正造建焉 上田織部正信 篠原仲左衛門延政 工匠宮川河内清教
廣瀬武助重久 田邊備後森安

図3 大谷祖廟 北門（惣門）棟札

【特別調査報告】 真宗大谷派大谷祖廟調査

北門は切妻造、本瓦葺の一間薬医門で本堂と同年の元禄十五年（一七〇二）十一月二十二日の建造である。東西を棟通りとする棟木下面中央に西を頭にして和釘留めされた棟札（図3）の裏面の確認はできていない。銘は本堂（図4）の棟札（西）（図2）と同じ「奉行」六名を配し、下段には「工匠」として本堂と同一の「笠井若狹可廣／宮川河内清教／田邊備後森安」を記している。これらはいずれも元禄十四年（一七〇一）の本堂斧始に出仕した「笠井若狹、宮川八郎兵衛、田辺八兵衛」と同一人物と思われ、工匠三名を併記する内の笠井若狹を筆頭とする三棟梁の造営組織が大谷祖廟元禄造営の時点で成立していたこと及び、三家の一つが高木家ではなく、宮川姓の工匠であったことを示す重要な資料である。

なお、北門は棟札では「惣門」の表記となっている。これに関して、安永九年（一七八〇）に刊行された地誌『都名所図会』卷之三所収の「東大谷」³⁵では西面する切妻造の正門があるのに対して、文久二年（一八六二）版行の「東山大谷之図」³⁶（図5・6）ではその位置（西面する「唐門」）を通じて東へ進み、中段が上がった所に門はなく、『都名所図会』には存在しない現在の北門が、「太鼓樓」の奥（東）に描かれている。このことから、表唐門（総門）の上棟年で、大谷祖廟での親鸞聖人六百回御遠忌法要が厳修される文久二年に完了した大谷新道（下参道・土手の築造）整備³⁷に伴って、旧惣門を現在の北門として移築した可能性があるう。ちなみに現在の大谷祖廟境内西側入口に建つ総門は前後軒唐破風付・檜皮葺の大型四脚門で、本山安政度造営と同じ「田邊河内道重／笠井若



図6 図5左下拡大



図5 東山大谷之図
(青木馨氏蔵)



図4 大谷祖廟本堂



山城國愛宕郡大佛住
井上三右衛門尉
吉尚
元禄十五年
壬二月吉日

図8 大谷祖廟本堂 旧獅子口 足元
(鱸) 瓦篋書



元禄十五年十一月吉日
井上三右衛門尉
吉尚
山城國愛宕郡大佛住

図7 大谷祖廟北門(惣門)背面及び
獅子口 足元 (鱸) 瓦篋書



狭正重／高木讀岐道保」を棟梁として、文久二年二月二十日に上棟されたものである。³⁸⁾

また、北門(惣門)大棟西端に葺かれた獅子口の背面足元(鱸)瓦側面(図7)には、棟札と同じ元禄十五年(一七〇二)の年記を含む瓦師「井上三右衛門尉吉尚」の篋書がある。大谷祖廟土蔵で保管されている本堂旧獅子口足元(鱸)瓦(図8)の元禄十五年二月の篋書銘にも、北門(惣門)と同様に井上三右衛門尉吉尚の名が刻まれている。

篋書にある大仏地域の瓦に言及すれば、江戸時代の京都瓦師は御用瓦師という仲間組織を結成し、その中でも大仏組や深草組などは主に二条城の御用を勤めていたという。³⁹⁾ また、井上三右衛門に関しては、明治度の本山再建事業を報じた機関誌の一つである『開導新聞』の明治十五年(一八八二)七月三日(第二七〇号)の記事で紹介されている。それは井上三右衛門と深草の寺本甚兵衛が天明(寛政)・文政・安政の三度の造営で瓦を調達した家柄であるというもので、代々東本願寺に出入りしていたことがわかる。他にも大谷祖廟表唐門棟札と同年の「文久二年／壬戌正月」(一八六二)の篋書が鬼瓦に残る大谷祖廟太鼓楼の瓦にも「御用／京大佛瓦師／井上三右衛門」の刻印が見られ、さらに明治四十三年(一九一〇)四月十七日上棟の東本願寺御影堂門棟札においても瓦工として井上三右衛門と寺本甚兵衛の名前がある。東本願寺以外にも、浄土宗総本山知恩院の本堂(国宝)・集會堂(重要文化財)及び三門(国宝)でも井上三右衛門の瓦は発見されている。⁴⁰⁾

以上のとおり、これまで文久二年（一八六二）上棟の大谷祖廟表唐門（総門）の一棟のみしか報告されてこなかった東御門跡大工笠井家を筆頭とする東本願寺三棟梁が関与した現存建造物が、そこから百六十年という時代を遡る元禄十五年（一七〇二）上棟の本堂・北門（惣門）という遺構において、それぞれの棟札によって確認されたことは重要である。また、これらの棟札は本山の元文度大門以前に笠井若狭が東御門跡大工であったことを示す元禄十五年の大工頭中井家関係資料「東御門跡大工笠井若狭一札」を裏付けるものであり、東本願寺工匠史において大きな意義を持つ。さらに北門は本山東本願寺に近代まで出入りした瓦師井上三右衛門の歴史をも伝える貴重な遺構であり、建築年代が確定していない廟所唐門など他の建造物も含め、今後の調査によるさらなる解明が期待される。

三 山科別院長福寺における三棟梁の newly 出史料

続いて東本願寺三棟梁の記録が確認できるのは、山科別院長福寺（京都市山科区）の享保の棟札においてである。

山科別院は本願寺八代蓮如（一四一五～九九）が創建した山科本願寺の旧跡に、第十七代真如の時に建てられた別院である。⁴³ 草創に関する資料は少ないが、『山科郷竹ヶ鼻村史』では享保十七年（一七三二）七月二十一日の「長福寺引移シニ付口上書」を紹介している。そこには「コ

ノ度、宇治郡山科郷竹ヶ鼻村ノ内、禁裏御料高三石六斗一升二合ノ畑敷地ノ内へ、東本願所御掛り所長福寺ヲ、右場所へ御引移サレタキ旨御願ニ付キ、（後略）」とあり、本山寺内にあった長福寺を元文二年（一七三七）三月には移徙したことが知られる。⁴⁵ 「引移シ」という言葉を裏付けるように山科別院に保管されている享保の棟札には、享保二十年（一七三五）九月の「奉修造御臺所」及び「奉屋根修覆西門」（ただし裏面に平成四年（一九九二）十二月の年記もある）、翌二十一年（一七三六）二月の「奉修造鐘堂」の計三枚があり、そこに建立や造建といった新造を示す文字は見当たらない。また、元文二年落慶の旧本堂棟札は保管されていない。ここで、享保の棟札の内唯一、三棟梁が記された享保二十年の「奉修造御臺所」棟札（図9）を掲載する。

棟梁三名の下に京大工として四名が列記されている。裏面の記載から、京大工の一人、久世勘右衛門の筆になる棟札である。注意すべきは三棟梁の一人が、元禄の大谷祖廟本堂・北門（惣門）の棟札における宮川家から高木家に交代していることである。これまで、この笠井・田邊・高木の三棟梁が統率する造営体制は東本願寺元文度大門が記録上最古のもので考えられてきたが、それ以前の享保の時点で事例が存在することが山科別院所蔵棟札により明らかとなった。先に述べたとおり、平成二十二年（二〇一〇）に大谷祖廟表唐門（総門）の修理の際に発見された文久二年（一八六二）の「四脚御門建立」棟札においてもこの三棟梁の体制（棟梁／田邊河内道重／笠井若狭正重／高木讃岐道保⁴⁶）は確認でき、

総高六五・三 cm 肩高六三・三 cm
上幅一八・〇 cm 下幅一七・六 cm 厚さ〇・九 cm

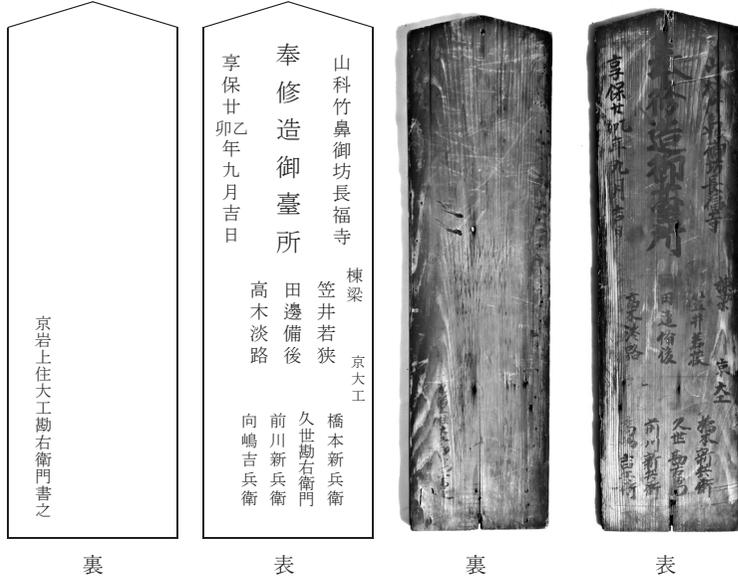


図9 山科別院長福寺台所棟札

東本願寺寛政度・文政度・安政度の造営を経て、江戸時代末期まで世襲継職されたことがわかっている。続く享保二十一年（一七三六）二月の鐘堂修復札では棟梁が高木淡路の一名のみで、横に肝煎として小沢藤三

郎を記しているのだが、翌年の元文二年（一七三七）十一月二日の東本願寺大門柱立てでは「笠井若狹・田辺備後・高木淡路」の三棟梁となっている。^{①7}『御再建見聞私記』（城端別院善徳寺史料）における「御影堂大門之事」によれば、享保四年（一七一九）三月二十六日の鉦始から元文二年十一月二日の柱立までに十九年を経たと記しているように大門作事は長期に及んでおり、この間に享保十七年（一七三二）から元文二年三月までの山科別院の伽藍造営も同時進行していたことになる。また、山科別院台所修造棟札に京大工として名前がある四名の内、橋本新兵衛・久世勘右衛門・前川新兵衛の三名は東本願寺大門柱立にも出仕していること^{①8}から、本山と山科御坊の造営組織は三棟梁だけではなく肝煎層も重複している。これに関連して、養源院（京都市東山区）の参道北脇に建つ木子棟齋碑の碑文の一節を紹介したい。そこには「明和年任播磨大椽^{①9}。祖某稱市右衛門。元文年作東本願寺正門及山科坊。」とあり、明和年間、播磨大椽に任官される市右衛門と称する棟齋の系譜上の祖が、この時の本山大門^{②0}及び山科御坊造営に参加していたことを誇示している。

なお、享保四年（一七一九）の東本願寺大門鉦始の時点での三棟梁が笠井・田邊・高木であったのか、大谷祖廟元禄造営時と同じ笠井・宮川・田邊であったのかは資料を欠き不明である。しかし、管見では幕末まで継続する笠井・田邊・高木の東本願寺三棟梁が現れる資料は、現時点においてこの享保二十年（一七三五）の山科別院台所修造棟札が最古のもの^{②1}といえよう。

その後、山科別院長福寺では天明七年（一七八七）、東本願寺第十九代乗如（一七四四～九二）の時に堂舎殿宇を再建したとの記録がある。⁽⁵²⁾ 平成九年（一九九七）の本堂屋根葺替修理の際に降ろされた大棟獅子口瓦の頂部には「天明四甲辰春／山城国深草住人／瓦師寺本甚兵衛」の篋書があり、天明再建を裏付けているが棟札は確認されていない。

おわりに

大工頭中井家関係資料「東御門跡大工笠井若狭一札」によって、元禄十五年（一七〇二）には笠井若狭が東本願寺大工棟梁であったことがわかり、延宝三年（一六七五）建立の長浜別院大通寺鐘樓の記録を最後に明暦・寛文度の東御門跡大工茨木家から交代している。さらに、「東御門跡大工笠井若狭一札」と同じ元禄十五年の大谷祖廟本堂・北門（惣門）の棟札からは笠井若狭を筆頭とする「三棟梁」（笠井・宮川・田邊）の造営体制となっていることが知られ、享保二十年（一七三五）の山科別院長福寺台所の棟札から、幕末まで続く笠井・田邊・高木の三棟梁がこの頃には成立していたことを示唆している。これまで本山での罹災からの造営が繰り返される天明八年（一七八八）の京大火以前において、報告されている東本願寺棟梁笠井家による御坊造営の事績は宝暦十二年（一七六二）に類焼した井波御坊瑞泉寺（富山県南砺市）の再建⁽⁵³⁾のみで、今回発見された棟札によって、それ以前に事例が存在することが判明した。

【特別調査報告】真宗大谷派大谷祖廟調査

笠井家を筆頭とする三棟梁による遺構及びその棟札が残っているのは管見では大谷祖廟のみである。それは三棟梁による黎明期である元禄十五年の本堂・北門（惣門）及び最終期である文久二年（一八六二）二月上棟の表唐門（総門）であり、江戸時代中期から末期まで東御門跡大工笠井家を筆頭に世襲継職された歴史を伝える貴重な建造物群といえる。⁽⁵⁴⁾ ここで、既往研究・文献（表参照）及び今回の調査を基に笠井家の歴史を列記すると次のようになる。

【笠井家歴代】（ ）内は確認できる年代・東本願寺造営を示す。⁽⁵⁵⁾

若狭可廣（元禄十五年（一七〇二））―若狭正傳（元文三年（一七三八））

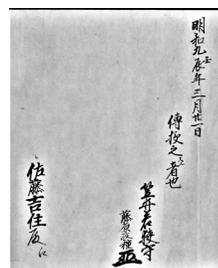
―若狭政種（明和九年（一七七二））―若狭正安（寛政度）

―三河正直（文政度）―若狭正典（文政度）―若狭正佐（文政度）

―若狭正重（安政度）―正言（明治十五年（一八八二））

なお、明和九年（一七七二）の笠井若狭政種については大石田町（山形県北村山郡）蔵佐藤家資料によった。大石田の大工佐藤吉住は笠井若狭の門弟で、同年に伝授された大工儀礼に関する三巻の相伝書の一つ（卷子装 縦二五・三cm×横二八五・一cm）の巻末に「笠井若狭守藤原政種」の奥書（図10）がある。⁽⁵⁶⁾

実はこの三巻の相伝書の一つである「番匠上棟大事次第」と同じ主題・内容の儀礼書が、国立歴史民俗博物館蔵「近世建築技術書」（H-771-8）及び滑川市立博物館蔵岩城家文書「御六條御殿御規式一件入」（仮21-11



明和九辰年三月廿一日

傳授之者也

笠井若狭守

藤原政種(花押)

佐藤吉住殿江

図10 佐藤家資料
(大石田町蔵)

18)にも存在し、それらはいずれも延享元年(一七四四)十一月の松田民部重興からの伝書となり、前者は笠井若狭へ、後者(岩城家による書写か)は柴田理右衛門へ伝授されている。この柴田理右衛門は東本願寺元文度大門肝煎の一人で、西本願寺阿弥陀堂(国宝)の宝暦九年(一七五九)棟札写において匠職水口若狭宗貞・棟梁水口伊豆宗為の下に三名記載された大工の筆頭「柴田理右衛門政種」の先代または本人と比定できる。また、『井波誌』所収の「瑞泉寺誌」における宝暦十三年(一七六三)九月十六日の井波御坊瑞泉寺新始の記事に「棟梁京都六條笠井若狭、名代柴田理右衛門」と書かれ、安永三年(一七七四)五月二十日の御堂上棟では「笠井若狭柴田理右衛門笠井の名跡也」とある。⁵⁸⁾これらのことから類推すれば、笠井若狭政種は柴田理右衛門政種と同一人物である可能性が高い。以上のとおり、調査を踏まえて笠井家の歴史を辿ったものの、現時点では三棟梁及び明暦・寛文度の東本願寺門跡大工茨木家を始め、いずれの出自も明らかにはなっておらず、今後の課題である。特に笠井家に関して、肝煎大工柴田家との関係性の整理も必要となろう。⁵⁹⁾

最後に笠井家の明治以降の動向についても触れておく。伊藤平左衛門十二代要太郎氏は『真宗』昭和六十年(一九八五)九月号「両堂再建物語(9)新始式」において、明治十三年(一八八〇)十月五日の『開導新聞』第一九号に掲載された次の記事を紹介している。「下京第三十組飴屋町に住む里井正吉は代々御本山の棟梁職で数十年相伝したが御一新の際御暇になり是まで雑業で暮したるが今どの御再建に付き家柄の訳で作事世話掛を申付られたのと当人は一方ならず有難がりて累代伝わる工匠の諸道具を寄附したに付き奇特なりとて御本山より金四十円を下されました」。この内容から里井正吉は本山最後の棟梁職笠井正言のことだとしてゐる。⁶¹⁾また、伊藤要太郎氏は『明治造営百年 東本願寺・下』「明治の両堂造営」で、安政度御影堂の万延元年(一八六〇)三月二十九日の棟札銘における三棟梁の一人、笠井若狭正重が笠井正言と同一人物だと推定している。その理由として、笠井若狭正重は安政六年(一八五九)、若年にして家督を継いで東本願寺棟梁職となり、安政度肝煎大工の一人、木子棟斎(棟札銘では柴田新八郎棟斎)が後見役を勤めたことを挙げてゐる。⁶²⁾なお、その後の笠井家の消息は明らかではない。⁶³⁾しかし、寛政度・文政度・安政度の短期間での三度の東本願寺再建事業は笠井家を含む三棟梁が統率する造営組織なくしては成し遂げられなかったものであり、明治度造営建造物の重要文化財指定理由の一つである「近世以来の伝統木造建築技術」の伝承には必要不可欠な存在だったといえる。今後その偉業は語り継がれていくべきであろう。

注

- (1) ①『真宗本廟(東本願寺) 両堂等御修復工事 御影堂御修復工事報告書』(真宗大谷派(東本願寺)、二〇一一年)。(2)『真宗本廟(東本願寺) 両堂等御修復工事 阿弥陀堂御修復工事報告書』(真宗大谷派(東本願寺)、二〇一七年)。(3)『真宗本廟(東本願寺) 両堂等御修復工事 御影堂門御修復工事報告書』(真宗大谷派(東本願寺)、二〇一七年)。
- (2) 『真宗本廟(東本願寺) 境内建築群総合調査報告書』(真宗大谷派(東本願寺)、二〇一八年)。
- (3) 文化庁監修『月刊文化財』六七一号(第一法規、二〇一九年八月)八頁「新指定の文化財―建造物―」、三二―三八頁。
- (4) 『真宗本廟(東本願寺) 造営史―本願を受け継ぐ人びと―』(東本願寺出版部、二〇一一年)。
- (5) 前掲注(4)五八―六五頁 永井規男「歴史上の東本願寺の大工棟梁」。
- (6) 前掲注(2)六頁「境内の建築一覽」における工事関係者には笠井の名前はない。
- (7) ①櫻井敏雄「八尾市文化財調査報告六七 顕証寺本堂調査研究報告書」(八尾市教育委員会、二〇一一年)六七―七〇頁「西本願寺の工匠」。
- ②櫻井敏雄「浄土真宗寺院の建築史的研究」(法政大学出版局、一九九七年)四六四―四六六頁「本願寺の工匠」。
- (8) 『同朋新聞』(東本願寺出版部、二〇一〇年八月)五頁 御遠忌NEWS「大谷祖廟整備事業」文久二年(一八六二)表唐門建立棟札。これまで安政四年(一八五七)以降に東本願寺からの移建と考えられてきた表唐門が、この棟札によって、文久二年の新築ということが判明した。
- (9) 前掲注(4)六〇、六一頁 永井規男「歴史上の東本願寺の大工棟梁」門跡大工笠井氏。二二七頁「寛政度再建の御影堂」では、寛政二年(一七九〇)に越中の門徒大工が記した『御再建見聞私記』(城端別院所蔵)と紹介している。
- 現在、善徳文化護持研究興會では『御再建見聞私記』を含む「城端別院善徳寺史料」の全文デジタル化・解説に取り組んでいる。同

【特別調査報告】真宗大谷派大谷祖廟調査

- 会古文書調査班浦辻一成班長より『御再建見聞私記』のデジタルデータ及び翻刻文を頂いた。厚く御礼申し上げ、以下のとおり当該箇所を掲載する。なお、田辺備後源芳倍は田邊備後源芳信と読める。
- 御大門上梁銘(寸法堅剣先ヨリ二尺九寸/高倍忝寸巾八寸四分)
- 棟梁
笠井若狭藤原正傳
法務十七世前大僧正釋真如大和尚造立 田邊備後源芳信
元文三年午四月朔日 高木淡路源喜始
- (10) 谷直樹『中井家大工支配の研究』(思文閣出版、一九九二年)三〇九―三二三頁「京大工組」、三二〇頁 中井家文書「東御門跡大工笠井若狭一札」。
- (11) 前掲注(4)六三頁 永井規男「歴史上の東本願寺の大工棟梁」肝煎大工柴田氏。
- (12) 『明治造営百年 東本願寺・下』(真宗大谷派本廟維持財団、一九七八年)一八―三八頁 川上貢「江戸時代の東本願寺建築」。
- (13) 前掲注(7)④七一、七二頁「東本願寺の工匠」。
- (14) 近松誉『東本願寺小景』(真宗大谷派難波別院、二〇一六年)九―一頁「棟梁の系譜(一)―東本願寺の工匠たち―」。
- (15) 前掲注(4)一七五、一七六頁「東本願寺御寺内之図(教如様御時之図)」(大谷大学博物館所蔵)トレースに寺内町の古い形態が絵図として描かれ、寺内の南東に宇野主水、川那部甚兵衛などの坊官・家臣の屋敷と並んで、絵所内匠、屋ねや大助、大工孫左衛門、大工庄三郎などの諸職人の名前も見られるが、詳細はわからない。なお、この「東本願寺御寺内之図(教如様御時之図)」は、「山科本願寺絵図」と共に大谷派初代講師光遠院恵空(一六四四―一七二二)の筆写になる貴重なもので、二点とも大阪市・慈雲寺住職江村鐵堂氏(一九〇一―七九)の寄贈になる。
- (16) 前掲注(7)④に同じ。『重要文化財 本願寺大師堂修理工事報告書』(京都府教育庁指導部文化財保護課、二〇〇九年)一二九頁寛永十三年再興作事方棟札。

- (17) 川上貢『近世上方大工の組・仲間』（思文閣出版、一九九七年）三一
一〜三一八頁「近世内裏の造営事情」。
- (18) 前掲注(4) 五八、五九頁 永井規男「歴史上の東本願寺の大工棟梁」
門跡大工茨木氏、六四三頁（明暦度）御影堂棟札銘等写。前掲注
(7) ①七一、七二頁「東本願寺の工匠」。前掲注(12) 二四頁 川
上貢「江戸時代の東本願寺建築」。前掲注(14) 九頁「棟梁の系譜（一）
〜東本願寺の工匠たち」。
- (19) ①東京都立図書館蔵木子文庫（木16338）「東本願寺御影堂棟札写
（明暦四）。②織田顕信「真宗教団史の基礎的研究」（法蔵館、二〇
〇八年）四七三〜五〇七頁「明暦度再建東本願寺御影堂造営につい
て―新出『遷座之記』を中心に―」。③『大系真宗史料』文書記録編
一三 儀式・故実（真宗史料刊行会、二〇一七年）二二四頁「法流
故実条々秘録」。
- (20) 前掲注(4) 一八七〜一八九頁「大工の構成」、六四三頁『粟津元隅
日記寛文六年阿弥陀堂一件抜書』。
- (21) 前掲注(4) 六〇頁 永井規男「歴史上の東本願寺の大工棟梁」 門
跡大工茨木氏。
- (22) ①『重要文化財大通寺客室（含山軒及び蘭亭）修理工事報告書』（滋
賀県教育委員会事務局文化財保護課、一九七一年）四九頁 鐘樓の
建立棟札。②奈良国立文化財研究所編『大通寺建造物調査報告書』（長
浜市教育委員会、一九九三年）三三、三四頁「鐘樓」。
- (23) ①『真宗の組織と制度』千葉乗隆著作集 第三卷（法蔵館、二〇〇
一年）三八三〜三九四頁「本願寺別院の推移」や、②『別院探訪』（東
本願寺出版部、二〇一二年）六〜一五頁 木場明志「別院の由緒と
今を訪ねて」によれば、別院は古くは御坊といひ、御堂・通寺・掛所と
懸所・兼帯所・末刹なども称される。また、時代や東西本願寺で
御坊の意味合いは若干異なるが、本稿では別院・御坊とも同じ意味
で用いている。
- (24) 前掲注(9) に同じ。
- (25) 前掲注(10) に同じ。
- (26) 川上貢編『幕府京都御大工頭中井家文書目録―長香寺寄託分―』（京
都大学工学部建築系教室建築史研究室、一九八三年）によれば、同
文書は中井家の菩提寺である長香寺（京都市下京区、浄土宗）へ、
中井家から寄託された文書群の中に含まれていた。文書番号B-131
b-5は、B-11中井家（役所）の職務に関するもの、3-11大工統制等、
b-11大工組関係の5番目を示している。同文書は平成二十三年（二
〇一一）、重要文化財に指定された「大工頭中井家関係資料」に含まれ
現在は大阪くらの今昔館で保管されている。同館の谷直樹館長（前
掲注(10)「中井家大工支配の研究」著者）より、ご教示頂いたこと
に感謝の意を表したい。
- (27) 前掲注(10) 二五〇〜二五五頁「中井役所の成立と棟梁衆の再編成」、
三〇九〜三二三頁「京大工組」。前掲注(4) 六〇頁 永井規男「歴
史上の東本願寺の大工棟梁」門跡大工笠井氏。
- (28) 前掲注(12) 三九〜五三頁 伊藤要太郎「明治の両堂造営」。
「地域を描く・寺社を建てる―『岩城家文書』の世界―」（滑川市立
博物館、二〇一五年）。岩城家文書に関しては、滑川市立博物館 近藤
浩二館長補佐にご教示頂いたことに感謝申し上げます。
- (29) ①『日本古典建築の設計原理の分析と現存遺構との比較に関する研究』
一九九五年度〜二〇〇七年度科学研究費補助金 基盤研究（C）研究
成果報告書（研究代表者 東北大学大学院工学研究科准教授永井康
雄）二七〜三〇頁「岩城家文書の概要」。
- (30) 前掲注(4) 七一四頁（安政度）御影堂棟札銘等写。
- (31) ①細川行信『大谷祖廟史』（東本願寺出版部、一九八五年改訂）一九
五〜二二三頁「東大谷祖廟の創立」、二五六〜二六一頁「維新後の歩み」。
前掲注(21) ②木場明志「別院の由緒と今を訪ねて」一一、一二頁
廢院となった国内の別院の例。
- (32) 前掲注(30) ①二一五頁「祖廟の改築と整備」。藤島達朗監修『大谷
本廟史』（大谷派宗務所、一九六三年）一九五頁。『大谷年中記』の
当該箇所を実見したが、筆頭は筒井若狭と表記されている。
この本堂建立の端緒として、前掲注(18) ②織田著書 四五九〜四
七二頁「東本願寺一如とその時代」では、東本願寺第十六代一如（一
六四九〜一七〇〇）が最晩年の元禄十二年（一六九九）に東大谷の

(32) 御堂再建を企てたが、完成を待たず翌十三年四月十二日に五十二歳で逝去したことが記されている。

調査にご協力頂いた大谷祖廟鈴木君代次長・大谷求氏に感謝申し上げます。これまで大谷祖廟の建築を取り上げた文献としては①『京都府の近世社寺建築』(京都府教育委員会、一九八三年)一五三頁「廟所・別院の本堂形式」、一六〇、二九八、三四四頁「東大谷本堂」や、前掲注(17)川上著書「三七四〜三七六頁」「京都市内の近世社寺建築」時宗、真宗寺院があり、いずれも本堂のみが紹介されているが、棟札及び工匠に関する記載はない。前掲注(4)六六〜九四頁「櫻井敏雄「御坊格寺院本堂の建築的構成と工匠」その平面と空間、意匠」所載の遺構表や、前掲注(7)①二四、二五頁「御坊遺構表において、『岡崎別院本堂(大谷派十九世紀中期)、東大谷本堂(元禄十二年)、佛光寺(本廟)本堂(安永四年)、西大谷本堂(十九世紀後期)は、外陣中柱が建たなかったり、建立年代も新しく小規模であるため除外した。」とあり、廟所本堂は掲載されていない。

(33) 大谷大学編『真宗年表』(法蔵館、一九七三年)一二四頁。前掲注(9)に同じ。

(34) 秋里籬島著、竹原春朝斎画『都名所図会』(吉野屋為八、一七八〇年)。「新修 京都叢書」第十一卷 都名所図会(光彩社、一九六八年)一三七、一三八頁「東大谷」。

(35) 東山大谷之図(青木馨氏蔵)縦三五・七cm×横四六・七cm。左上に「文久二壬戌歳/三月從廿三日御連夜/同至廿八日御日中/大御遠忌御執行/御庭儀御行粧図」、右下に「御寺内書林/版元/丁子屋九良右衛門/同 平兵衛/同 七兵衛/六柳 四方春翠拝画」とある。撮影・掲載の許可を頂いた青木馨氏には感謝の意を表す。「東山大谷之図」の二年後に刊行された地誌『再撰花洛名勝図会』(神光向松堂、一八六四年)。立命館大学図書館所蔵善本複製叢書(第一期)近世風俗・地誌叢書 第五卷『再撰花洛名勝図会』東山之部(下)(龍溪書舎、一九九六年)七四、七五頁「東山大谷御廟所」でも同様の建物描写となっている。

(36) 前掲注(30)①二四七〜二五二頁「祖像の大谷避難」。

(38) 前掲注(8)に同じ。惣肝煎も同じ柴田伊勢大掾貞次が勤めている。

(39) ①寺本光男編『二条御城中御修復二付諸願書并諸調査書大要録』(寺本甚兵衛製瓦、二〇一一年)。寺本家現当主の光男氏からは数々の文献及び情報を賜ったことに感謝申し上げます。②展示図録35「わざの極意は道具にあり―山城の瓦づくり―」(京都府立山城郷土資料館、二〇一四年)一六、一七頁「京都の造瓦組織について―江戸時代から明治にかけて―」御用瓦師について。

(40) ①『開導新聞(三)』『宗報』等機関誌復刻版24(東本願寺出版部、一九九九年)五五五頁 明治十五年七月三日「開導新聞」第二七〇号、三頁。②寺本光男編『東本願寺御影堂(文政度) 再建瓦』(寺本甚兵衛製瓦、二〇〇八年)。③寺本光男編『深草瓦師資料』(寺本甚兵衛製瓦、二〇一〇年)二頁「寺本家過去帖年表」及び寺本光男氏の教示によれば、寺本家と井上家は姻戚関係にある。また、「寺本甚兵衛」の鑑書銘は大谷祖廟本堂古瓦からも発見されている。

(41) 前掲注(1)①一七八、一七九頁 資料―棟札。

(42) ①『国宝・重要文化財 知恩院本堂及び集會堂ほか二棟修理工事報告書(本堂・本文編)』(京都府教育庁指導部文化財保護課、二〇一九年)一五四頁 井上銘を持つ瓦。②『国宝・重要文化財 知恩院本堂及び集會堂ほか二棟修理工事報告書(集會堂編)』(京都府教育庁指導部文化財保護課、二〇一二年)八一頁 瓦刻印各種 その2。③京都府教育庁指導部文化財保護課編『重要文化財 知恩院三門修理工事報告書』(京都府教育委員会、一九九二年)一〇八頁 瓦職人名の刻印。

(43) 前掲注(21)①一六二、一六三頁 草野顕之「山科別院」。

(44) 『山科郷竹ヶ鼻村史』(佐貫伍一郎、一九八六年)三八二、三八三頁「東御坊の建立」。

(45) ①『本願寺誌要』(真宗大谷派本願寺誌要編輯局、一九一一年)二九七、二九八頁「山科別院」。②石川松衛編『京都府山科町誌』(京都府山科町役場、一九三〇年)二九四、二九五頁「山科大谷派別院」。

(46) 前掲注(8)に同じ。

(47) 大谷大学真宗総合研究所編『天明八年日記 御再建日記』真宗本廟(東

(48) 本願寺) 造宮史料叢刊1 (大谷大学、二〇一四年) 三七七〜三七九頁。寛政十二年(一八〇〇)三月二十六日の寛政度「大門御柱建御規式役書」の先例として、元文二年(一七三七)十一月二日の役書が記載されている。役職名は書かれていないが、元文度の「笠井若狭・田辺備後・高木淡路」の三名は、寛政度大門の三棟梁「笠井若狭・田辺備後・高木小太郎」と同じ大紋(だいもん)を着用している。前掲注(47)に同じ。寛政度大門柱立役書と装束を照合すれば、布衣(ほい)を着用した四名が惣肝煎(谷口五兵衛・木子市右衛門・富永理兵衛・柴田理右衛門)で、素袍(すおう)を着用した十四名が平肝煎(谷口宇右衛門・宇治川善兵衛・久世勘右衛門・川原崎源兵衛・中嶋甚兵衛・橋本新兵衛・笠井宇右衛門・日下部治兵衛・前川新兵衛・高木三郎兵衛・中嶋甚兵衛・高嶋善兵衛・吉岡甚兵衛・長谷川茂兵衛)に該当すると思われる。この内、谷口五兵衛・谷口宇右衛門は、『長岡京市史』建築・美術編(長岡京市役所、一九九四年)八七頁所載の西山浄土宗総本山光明寺御影堂(長岡京市指定文化財)棟札(元文元年斧始、宝暦三年上棟)における棟梁の筆頭に名前がある(京都四條坊門通御幸町西エ入所) 谷口五兵衛源重治・(五兵衛次男) 谷口宇右衛門源重持と同一人物であろう。

(49) ①東京都立図書館蔵木子文庫(木74-4-28)「墓碑拓本/木子棟齋墓碑」(明治廿六年七月建)。②美浜町誌編纂委員会編『わかさ美浜町誌』(美浜の文化)第三巻 拝む・描く(美浜町、二〇〇五年) 四三四〜四四三頁「木子棟齋像及び碑文」。

(50) 前掲注(47)、(48)に同じ。元文二年(一七三七)の東本願寺大門柱立に出仕した工匠で、木子姓は木子市右衛門のみである。また、棟齋は柴田新八郎(木子) 棟躬(日向掾、一八〇一〜一四九)を継いで、柴田新八郎棟齋も襲名している。参加者の内、柴田姓は柴田理右衛門だけである。

(51) 山科別院長福寺の享保の棟札が保管されている建造物(台所・西門・鐘楼)はいずれも現存していないが、境内南西に建つ太鼓楼(京都府暫定登録文化財)は、下層に保管された太鼓の銘から宝暦二年(一七五二)に橋村理兵衛が張替をしており、享保創建時の建築の可能

(52) 性もあるが、棟札は発見されていない。調査協力並びに台所棟札の撮影・掲載許可を頂いた同別院列座北脇隆昭氏に感謝申し上げます。前掲注(7) ④櫻井著書三〇二〜三〇四頁「山科別院長福寺」、前掲注(32) ①一六二、二九九、三四五頁に、山科別院長福寺が掲載されているが、棟札や工匠に関する記載はない。前掲注(45)に同じ。

(53) 井波彫刻宗家番匠屋十六代田村与八郎氏よりご教示を賜り、感謝申し上げます。「井波町史」上巻(井波町、一九七〇年)五四二頁掲載の「瑞泉寺再建新始式次第」宝暦十三年(一七六三)に「狩衣 京都/笠井若狭」と記されている。また、千秋謙治著『年表でみる井波瑞泉寺』(桂書房、二〇一四年)六〇、六一頁所載の瑞泉寺蔵「越中国礪波郡井波杉谷山瑞泉寺御坊鋪地絵図并近辺所見之図」(縦一六九cm×横二七七cm)に「安永四年末二月中旬」(一七七五)の年記及び「笠井若狭傳/圖師 柴田貞英書之」という署名がある。なお、「瑞泉寺再建新始式次第」は佐々木嘉平蔵となっている。越中砺波福野(富山県南砺市)出身の大工佐々木嘉平(代々襲名) 四代棟慶(一八八九〜一九八三)のことで、私家版『名工佐々木嘉平伝』(斎藤五郎平、一九七三年)によれば、初代嘉平は柴田新八郎貞英(東本願寺寛政度惣肝煎頭・井波御坊再建棟梁代)の高弟とされている。

(54) 大谷祖廟表唐門(総門)と同時期に、東本願寺境内では徳川家康の位牌を安置する東照大権現宮靈儀殿が建立され、その文久二年(一八六二)八月二十九日上棟の添札銘(前掲注(12) 五五頁「文久二年別堂 棟札銘写」)が三棟梁の記録が確認できる最後のものと思われるが、元治元年(一八六四)の禁門の変により焼失している。文政度の若狭正佐は滑川市立博物館蔵岩城家文書(仮0-13-30)「番匠研究 徹到録 甲」明治三十六年(一九〇三)所載の文政度「御大門御上棟札写」弘化四年(一八四七)三月廿六日落成「棟梁/笠井若狭正佐/田邊備後義重」「肝煎/柴田新八郎棟躬/中江貞次郎義忠」によった。明治の笠井正言は、前掲注(40) ①六九頁 明治十五年(一八八二)二月二十五日『開導新聞』第二〇九号、五頁の記事で、再

建局附属史で石築地築係を申付けられたとある。

前掲注(4) 六二頁 永井規男「歴史上の東本願寺の大工棟梁」門跡大工笠井氏では、次のように系譜を推定されている。
若狭正傳―三河正安―若狭正安―三河正直―若狭正典―若狭正重
高橋恒夫『近世在方集住大工の研究』(中央公論美術出版、二〇一〇年)
四四九―四七九頁「最上川水運の大石田河岸の集落と其の諸職人」。
同書掲載の佐藤家資料は大石田町(山形県北村山郡)クロスカル
チャープラザ桂桜会館にて常設展示されている。同町産業振興課柏
倉一輝氏より、撮影・掲載の許可を頂いたことに感謝申し上げます。
佐藤家資料には「東本願寺本堂木割」(縦三〇・三cm×横四四・三cm)
という寛文度阿弥陀堂の木口絵図(平面図)も含まれている。東本
願寺寛文度阿弥陀堂の詳細な平面規模を記す資料は、前掲注(12)
二五頁掲載の京の町大工田中家(近江屋吉兵衛)文書「在来阿弥陀堂」
図以外は報告されておらず、大変貴重である。

(57) 国立歴史民俗博物館事業課資料係の森合文子氏・関初弥氏よりご教
示頂いたことに感謝申し上げます。

(58) ①京都市教育庁指導部文化財保護課編『重要文化財本願寺本堂(阿
弥陀堂)修理工事報告書』(京都市教育委員会、一九八四年)八頁
富島旧記 棟札の写し。②本願寺史料研究所編 増補改訂『本願寺史』
第二巻(本願寺出版社、二〇一五年)四五二―四五四頁 阿弥陀堂
再建の成就。

匠職 水口若狭守藤原朝臣宗貞 柴田理右衛門政種
奉修造御仏殿 宝曆九卯歳初夏如意日 大工 雑賀長右衛門貞好
棟梁 水口伊豆守藤原朝臣宗為 藤井三左衛門保住

(59) 宇野柏里(宇野次四郎)『井波誌』(町立井波図書館友会、一九三
七年)「瑞泉寺誌」三三、四一頁。

(60) 「両堂再建と匠の系譜―伊藤平左衛門家と東本願寺―」『真宗』(東本
願寺出版部、二〇〇三年十二月)一九頁で、伊藤平左衛門十二代・
中部大学名誉教授伊藤要太郎氏(一九二二―二〇〇四)は東本願寺

【特別調査報告】真宗大谷派大谷祖廟調査

所蔵資料と伊藤家の過去帖から、紀州鷲森からついできた三十六人
の大工衆のうち高木・田邊・笠井の三家が東本願寺棟梁となってい
ると述べている。高木・田邊を鷲森からの御供大工をルーツとする
根拠は不詳であるが、笠井家に関しては伊藤平左衛門八代守富によ
る日記・覚書『見聞学行跡集』に所収された「新八郎由緒書」が典
拠になっていると思われる。同書は前掲注(12)において要太郎氏
が執筆した「明治の両堂造営」の中で守富による原文と共に紹介し
ている。この「新八郎由緒書」は守富の妻みちの実父で、共に安政
度造営肝煎大工を勤めた柴田伊勢大掾貞次(二七九〇―一八六三、
大谷祖廟表唐門惣肝煎)が所持する秘伝の一軸を、安政五年(一八
五八)に守富が書写したものだという。そこには貞次の系譜にある
東本願寺寛政度惣肝煎柴田新八郎貞英(一七四一―?)が、寛政
八年(一七九六)に記した寛政度御影堂の正寸と共に、「紀州鷲之森
ヨリ御供大工三十六人ノ内ノ釋了勝末孫」という自家の由緒も誇示
している。さらに「新八郎由緒書」では柴田家が東本願寺棟梁笠井
家の系譜にある旨の記述も含むため、紀州鷲森からの御供大工三十
六人を笠井家のルーツとして、要太郎氏が口述したのであろう。

(61) ①伊藤平左衛門「両堂再建物語」(9) 新始式『真宗』(東本願寺出
版部、一九八五年九月)一三頁。②『開導新聞』(一)「宗報」等機
関誌復刻版22(東本願寺出版部、一九九九年)一六六頁 明治十三
年(一八八〇)十月五日『開導新聞』第一九九号、八頁。

(62) 前掲注(12) 五〇頁 伊藤要太郎「明治の両堂造営」。
(63) 前掲注(4) 六二頁 永井規男「歴史上の東本願寺の大工棟梁」門
跡大工笠井氏。永井規男氏は明治度の再建事務局付属史笠井正言を
笠井正重の子と推定されている。

〔付記〕
小稿をなすにあたっては、水野耕嗣氏、渡邊俊一郎氏、安藤弥氏、青
木馨氏、小山正文氏から有益なご教示に与ったことを深謝申し上げます。

《史料紹介》

『元禄十六年大谷御堂移徙之記』

ここに紹介するのは真宗大谷派大谷祖廟が所蔵する『大谷御堂移徙之記』である。元禄十六（一七〇三）年三月二十八日に執筆されたもので、同日に行われた法要の記録である。同名・同内容の冊子がもう一点、確認されるが、やや詳しく記録されている本書のほうを全文翻刻、紹介する。

本書の書誌情報は、竖帳・袋綴一冊で、寸法は縦二八・七cm×横二〇・一cm。墨付は一四丁（表紙・後表紙を含む）である。状態はおおむね良好であるが、やや虫喰いが多く、文字の判読しにくい箇所もある。翻刻にあたり、塗抹とみられた一文字は■で表記した。

『大谷祖廟史』によれば、関係史料に基づき、元禄十二（一六九九）

安藤 弥
川口 淳
千枝 大志

年に造営工事が始まり、翌年に東本願寺第十六世一如が没したことに寄り一時休工となるも、翌々年にその一周忌がわって後、普請が再開され、精力的な作業の中で、九月二十八日には改葬法要が行われたことが明らかにされている。さらに工事は継続され、元禄十六年に至って遷仏法要が行われたことも記されている。

『大谷祖廟史』は『大仲居日記』と「御馳走之次第」という史料から法要の様子を点描しているが、本書の内容を加えることで、より詳しい儀式の実態、関与した人たちの顔ぶれ等を知ることができる。本格的な検討は後考を期したい。

(表紙)

元禄十六癸未年

大谷御御堂移徙之記

三月廿八日

(1丁表)

東山大谷御堂移徙之記

元禄十六癸未年三月廿八日巳ノ

中刻、御移徙之御法会有之、内陣

御飾、御道具出納役、長覚寺・教円坊・

円重寺、右三人ハ被 仰付候、因之、

諸色、御道具、御藏ハ取出シ、廿六日

(1丁裏)

早朝、大谷ヘ為持遣シ、三人共、朝飯後。

相詰、御法事之拵致被申候、

廿六日未ノ刻、御成、御連枝方・御堂衆

御習礼有之、行道有之故、前卓取除

御本坊ノ阿弥堂之礼盤取寄、須弥壇

之前ヘ直シ御居箱二ツ三衣袋入候ト
御柄香炉入候ト

引付

(2丁表)

左右ハ飾付置候、経台ニ

御所様、折本之御経、御箱共ニ直シ、

御草鞋、後門ニ直置申候、

一、花籠棚、仮新敷ク拵ヘ、赤地布敷

華籠飾候、御花籠配撤、 常德寺子

小僧四人 泉徳寺子

等覚寺子

教円坊子

(2丁裏)

一、切燭并御経配撤ノ役了廓
良由

右、何モ御習礼之節、相詰申候、

一、廿七日、花三瓶立之、御本尊様御前

一瓶 松ノ一色 常德寺

祖師御前 一瓶松ノ真竹ノ副
草花勝福寺

前住様御前 松ノ真草花勝福寺

(3丁表)

一、聖人等身ノ御影并前住様御影

皆得院殿御掛候、

一、内陣御飾、今日八ツ時分致候、

御本尊様上卓打敷、萌黄地金襴

花瓶、檀^ヲ立、土香炉向^ヘ寄、金香炉

前^ニ置、松ノ一色ノ花、須弥壇上ノ

(3丁裏)

方高棟ノキハニ直^ス、同東ノ方鶴

御華束彩色供華^{金ノ蓮ノ絵}

右之華束二具、須弥壇上花瓶ノ

向^ト鶴ノ向^フニ備^之、

一、聖人尊前打敷紫地錦、御花束

二具、右同断、

(4丁表)

一、前住様御前打敷^{萌黄地}御花束^{二具}

一、右之華籠棚、後堂西ノ方北壁キハ

金屏風立前^ニ置盛華入り候、花籠

飾^之、餘間之葎両方共^ニ取披^キ申候、

御所様御花籠ハ、箆筒^ニ入候^ヲ右^之

花籠棚^ニ置候、依^之、今日^ハ番人付置^{申候}、

(4丁裏)

一、翌晨朝過、廿八日未明^ニ、出納役三人者、

相詰、飛擔・平僧之定衆^ヘ、御経上卷

并机共^ニ相渡^シ、飛擔之御経、朱塗^キ之

机^ニノセ、東西両方ノ椽^ニ直^ス、平僧^之

御経ハ、溜塗^之机^ニノセ、南ノ椽^ニ直^ス、

右之御経、何^{レモ}御本坊御蔵^ハ遣置候、

(5丁表)

一、丹表紙^{玉軸}同木軸朱塗^之机^ニ廿五卷

ツ、ノセ、内陣・余間ノ滑間ノキハニ直^シ

置、東ノ方同事、是ハ院家衆^并

御一家衆之御経也、

一、外陣正面折障子ノ敷居際^ニ、黒

塗^之机^ニ、上卷五十卷ノセ直^シ置、是ハ

(5丁裏)

御堂衆御経也、同経机ノ右ノ方^ニ

青漆^之台^ニ鑿^ヲノセ、撥共^ニ直^シ置、

一、内陣、礼盤、経台ノ上^ニ

御所様御経^篋ニ入直^シ置候、

一、経台ノ東方、磬台ノ向^ニ鑿^ヲ台^ニノセ、

撥共^ニ直^之、

(6丁表)

一、御居箱、三衣袋入候^ヲ、持蓮花^ヲ取除、

其台ノ上^ニ飾^ル、又一方ハ磬台之前^ニ、

御居箱^ニ、柄香炉^ヲ入飾^リ置、

一、御所様ノ御和讃卓^并御砂張、

後堂へ引置、御連枝方ノ和讃卓モ

同事、

(6丁裏)

一、今朝、御本坊之御日中、六ッニ始リ、其レ過候而、御堂衆、其外諸僧、大谷へ来集、

一、双林寺、五ヶ寺共ニ、御借ラセ候而、諸僧参集

之宿坊ニ被 仰付候、院家衆・御一家衆

宿坊善阿弥、飛擔宿坊 阿弥 阿弥

二ヶ寺、平僧宿坊 阿弥、御堂衆宿坊

臨阿弥、御連枝方宿坊法花寺、

(7丁表)

一、臨阿弥庭上坪御内、御堂階之下迄

薄縁リヲ敷、是ハ諸僧御堂江一行ニ練リ

致出仕候、尤ハキ物ナシ、僕ハ一人モ入不申候、

一、御所様、巳之刻、被為成、臨阿弥庭上ハ直ニ

御堂へ御通り被遊、御座へ被為人候、

御連枝方モ同事、

一、巳之中刻、諸僧御堂へ参入、出仕之次第、

(7丁裏)

最初、御堂衆、大衣ニ而一行ニ練リ、御堂

外陣、祖師尊前之敷居際ハ次第、

着座、本座畢而、列座次第ニ、座ニ着申候、

右之引次ニ、院家衆・御一家衆、大衣ニ而一行

練リ、御堂正面之縁ハ東之方之縁ヲ通り

後堂へ入、餘間部上ヶ経所ハ出仕、即其

東西両方之餘間ニ着座、

(8丁表)

右之引次ニ、飛檐、大衣ニ而一行ニ練リ、堂内列

座之置リ居候後座ハ東西両方之縁

欄干之内ニ着座、

右之引次ニ、平僧一行ニ練リ、初ハ純色・七条、

次ハ、裳附・五条、次ハ墨袈裟、欄干之外、

平張之所ニ着座、是ハ御移徙ニ付、

御堂檐外、表三方何間云々ニ、但シ、三間

(8丁裏)

平張出来、畳何程敷、坊主衆居候座也、

右之平僧出仕之内ニ、内陣三所御前ニ

蠟燭燃申候蠟燭ハ何レモ銀濃也

一、御所様、御草鞋ハ後門ニ直シ置、

御連枝方、草鞋ハ後堂直シ置、

一、御草座、堺淨徳寺、御座ニ敷也、

一、御連枝方出仕、内陣東西両方ニ次第ニ

(9丁表)

御着座、西之首座、惠明院様、次
応真院様、次聞光院様、次超絶院様、
次東之首座、深廣院様、次能令院様、
次深諦院様、次 本瑞寺様、

一、右着座畢而、

御所様御入堂、御装束御袍裳朽葉ハツ藤

御七條綴御修多羅衣

(9丁裏)

一、先請弥陀之伽陀始り、御草鞋直シニ

本泉寺出、伽陀二句目ニ御座具

光徳寺敷之、次、御連枝之御経

上卷四卷ツ、載セ、東之方ハ卓一脚、西之

方ハ卓一脚、配之、丹表紙・折本之御経、

伽陀役ハ配之、四句目ニ登高座被遊、

御焼香之節、祖師尊前并

(10丁表)

前往様御前、焼香出納役之内兩人ニ而仕候

大経上卷、罄ニ而、御始被遊候、

拍子木、
常徳寺

惠照

御経半ハニ切燭

了廓

兩人ニ而仕候、

良由

又、風吹、散華上リニ而、蠟燭立替、右之兩人ニ而、

(10丁裏)

致候、御経畢而、万行俱廻之伽陀之内、

小僧一方ハ二人ツ、ニ而、華篋配之、

伽陀畢而、罄ニ而、小経漢音 御始メ

被遊候、千二百五十人俱之時、御花篋ヲ

本泉寺持出而、両曼多羅之時、

拍子木、
常徳寺

外陣正面ニ而打之、上方世界之時分、

(11丁表)

御所様、正面御廻り候節ヲ見合セ、

拍子木 同打之
常徳寺

漢音終り候前ニ御華篋 本泉寺

撒之、御所様、御登高座被遊

漢音経ニ而、直入弥陀之伽陀始り、双方

之華篋、右之小僧二人ツ、ニ而撒之、

御下高座被遊、大豊江御着座、

(11丁裏)

右、御草鞋、本泉寺直之、御座具

光德寺引之、右、伽陀畢而、外陣ニ直置候、

鑿打之 常徳寺

御所様、文類正信偈 御始メ被遊、

正信偈之内 祖師尊前ト、前住様

御前ト、御両所へ、御焼香被遊候、焼香之

大上卷終リ之前、改メ土香炉ヲ向へ寄セ

(12丁表)

金香炉前へ直シ置候、御焼香済候而、

御和讃卓、光德寺直之、御連枝方

之和讃卓、東西へ一脚ツ、了廓
良由

兩人ニ而出之、西之首、恵明院様御前ト

東之首、深廣院様御前トニ直之、

御和讃、弥陀成佛、次第三首
念讃洵八 御廻向

願以此功德、被遊候而、御和讃卓

(12丁裏)

光德寺引之、御連枝之和讃卓了廓
良由

引之、

一、御廻向畢而、内陣之分へ下座る退出、

御所様、後門江御入リ被遊候而、御草座

浄徳寺引之、次ニ、院家衆・御一家衆

次第二退出、次ニ平僧、次ニ飛檐、退出、

次ニ御堂衆、退出、

(13丁表)

一、右之諸僧、於宿坊、強飯被下候、

右、御法会済候而、内陣之御飾、今日中、

其俣置、参詣之諸人、御堂江入拜申

申之切候、

(了)

課題・展望

大谷祖廟史の再検討について、課題と展望を探っておきたい。

一つには、特別寄稿が問題提起するように、建物の歴史を正確に捉え、造営に携わった人たちの歴史の実態をあきらかにすることである。

寺院史の全体像は幅広いが、本堂を中心とする建物がどのようにあるのか、その造営・維持にどのような人たちが関わるのかという点は基軸に据えられるべき論点である。

技術者に焦点を当てての意義はもちろん、僧侶の存在も重要ながら、支える信者（門徒）への注目も必要である。大谷祖廟には毎月二十八日の大谷講、琢如の祥月命日である四月十四日にちなんで毎月十四日に寄合を持つ女房講があったという（『京都府の地名 日本歴史地名大系』平凡社、一九八一年）。これらの講は、どのような歴史の実態を有したのであろうか。大谷祖廟を支える信仰・地域基盤のありかたが問題となる。そこからさらに、京都東山という地域社会における大谷祖廟の位置付けもまた検討課題となってくるであろう。

もう一つには、史料紹介したような文献史料を丁寧に読み解き、大谷祖廟の歴史的日常をあきらかにすることである。毎日の儀式とそれに関わる人たちの営為は一般に注目されない。しかし、真宗史・仏教史においてその場面への丁寧な注目は本来、重要な課題のはずである。儀式を営む僧侶の顔ぶれや出入り、その出自等、史料には記されているのであ

り、それを意味付けられるかどうかが問われる。

ところで、こうした課題を検討していく際に、根本的に考える必要があるのは、大谷祖廟の「墓」としての性格ではないであろうか。「真宗本廟」としての東本願寺における位置付けや関係性もさることながら、親鸞・本願寺歴代等の「墓」であるのみならず、そこには、多くの真宗門徒の「墓」がある。武家墓などの存在も注意される。

大谷祖廟の歴史的意義は、あらためて「墓」という視点から深く考察してみる必要があるように思われる。後考を期したい。

（文責 安藤 弥）